

Zoomによる大会開催に関して事務局よりお知らせ

感染症流行などの状況を鑑みまして今年度もオンライン上で年次大会を開催することとなりました。プログラムに先立ちご案内申し上げますので、ご一読のほどをよろしくお願いいたします。

1. 年次大会 Zoom 開催について

年次大会は昨年同様オンライン会議システム Zoom を使用して開催いたします。Zoom のミーティング情報の詳細は後日メールにてお知らせします。その際、会議が行われるサイトの URL 並びにミーティング ID 番号、パスコードをお送りします。日本シェリー研究センターにメールアドレスの登録がない方で Zoom 大会への参加をご希望の方は、11月25日（木）までに詳細送付用のメールアドレスを開催ホストである黒瀬 (euk@vel.bbiq.jp) にお知らせください。その際、件名は「21年度大会参加希望」としたうえで、会員の方はお名前、会員でない方はお名前とご所属をお知らせください。Zoom ミーティングへの参加方法に関しては、以下のリンクをご参照ください。

Zoom ミーティングに参加する方法

<https://zoom-japan.net/manual/pc/join-zoom-meeting/>

2. 特別講演について

本年度の特別講演は、パスワード付きファイルとして12月1日（水）から今年度末まで日本シェリー研究センターHPに掲載いたします。パスワード等の必要な情報は追って会員の皆様にメールにてお知らせいたします。ご了承ください。

3. 懇親会のお知らせ (Zoom 開催)

大会と同じ Zoom 会場にて 16:30~17:30 に懇親会を予定しております。入退室の時間などに関しましては特に制限は設けませんので、ご都合に合わせてお気軽にご参加ください。お好きな食べ物、飲み物をご用意の上、画面越しにご歓談いただけたらと願っております。

4. 出欠確認について

毎年、ハンドアウト部数や懇親会参加人数の把握のために出欠をお伺いして参りましたが、今回の大会はオンライン形式のため、お手を煩わせる必要はなくなりました。よってプログラム配信に伴う事前の出欠確認はいたしません。例年変わらず多くの方のご参加をお待ちしています。

5. 会費について

会費のお支払いは振り込み用紙をご利用いただくか、下記の振込先までよろしく願いいたします。

振込先：ゆうちょ銀行 00190-0-661999 日本シェリー研究センター

6. ご質問など

Zoom 開催に関してご質問やご懸念などがあれば、開催ホストである黒瀬 (euk@vel.bbig.jp) までご連絡ください。

日本シェリー研究センター第30回大会

日時： 令和3年（2021年）12月4日（土）14:00～

場所： Zoomによるオンライン開催

プログラム

1. 14:00 開会の辞 会長 木谷 巖
2. 特別講演（資料事前配布） 松島 正一
ダンテとシェリー
3. 14:10 ワークショップ 鈴木 喜和
キーツの初期ソネットを読む—「音楽」の諸相と射程
4. 16:10 年次総会
昨年度分会計報告・役員改選・その他

*16:30 懇親会

特別講演

ダンテとシェリー

松島正一

本イギリス・ロマン派の詩人のなかでダンテの影響の大きい詩人は、バイロンとシェリーである。2人はダンテからテルツァ・リーマの詩形だけでなく、ダンテの思想も学んでいるが、最も大きな主題は「愛」の問題である。ダンテとベアトリーチェ、その愛はバイロンとテレーザ、シェリーとエミリアの関係に置き換えられる。

1819年4月、バイロンはヴェニスでテレーザ・グイッチョリー伯爵夫人

に紹介され2人は恋に陥ります。テレーザ夫人は夫に伴われてラヴェンナに帰るが、2人の愛は続く。バイロンの『ダンテの預言』はラヴェンナで靈感を受けて執筆されたものである。また、2人の愛は『神曲』「地獄編」第5歌のパオロとフランチェスカの挿話そのものである。バイロンの関心はこの部分を英訳していることでもわかる。

シェリーのダンテは『新生』であり、『神曲』ではベアトリーチェの登場する「天国編」である。シェリーの『詩の弁護』によれば、「ダンテはペトルカ以上に愛の秘密を理解していた。ダンテの『新生』は清純な情緒と言語の尽きることのない泉である。『新生』はあの時代と、愛に捧げられたダンテの生涯の様々に理想化された歴史である。「天国編」でのベアトリーチェの聖化と、彼女へのダンテの次第に高まる愛、そして彼女の美しさ。あたかも階段を登るがごとく「至高天」(=神の玉座)まで登り着く。これこそ近代詩における最も輝かしい想像力の産物である」ということになる。

シェリーは1820年、ピサ大学のバキアーニ教授によつてのエミリア・ヴァイヴァイアーニを紹介される。高貴にして美貌の独身女性は、たちまちのうちに詩人の心を捕らえた。シェリーの『エピサイキディオン』はエミリアに呼びかけた作品である。

講演では、まず講演者のダンテとの関り合いから、『神曲』とはどういう話なのか、なぜ『神曲』は古典なのか。次に、イギリスにおけるダンテの移入、特に18世紀の『神曲』翻訳へと話を進める。最後に、バイロン、シェリーとダンテの愛について、特にシェリーはダンテの愛をどう捉えたかについて話したいと思う。

(まつしま・しょういち：松島正一)

ワークショップ

キーツの初期ソネットを読む―「音楽」の諸相と射程

コーディネーター 鈴木喜和

本ワークショップではキーツの第一詩集に収録されたソネットの中から3篇を選び、精読を行う。キーツはその創作活動のいずれの時期においてもソネットを作っているが、この14行の表現形式が担った役割はアウトプットの量とともに、とくに初期において大きい。初期のソネットの中核を成しているのは、リー・ハントの影響下に書かれたものや、彼やその周辺に集った文人たちとの交流から生まれたものである。そこで採用されたのはペトラルカ風であるが、キーツはのちにシェイクスピア風も試し、どちらの形式にも不満を覚えるようになる一方で、珠玉のオード群ではその作詩法にソネットでの経験がたしかに生かされている。『1817年詩集』中の番号が付された17篇のソネットでは、駆け出しの詩人が抱く文学や自然の美に対する瑞々しい情熱が表出され、ときにその表現は友愛精神や愛国心、さらにはリベラルな政治思想が滲むものとなっている。巻頭の断片的で題名のない、散漫な筆致の長篇詩(‘I stood tip-toe upon a little hill’)が基調をなす中、制約の厳しいジャンルで示された瞬時の構成力は、掉尾を飾るこれまた冗長な‘Sleep and Poetry’での野心表明の前で、偉業に挑む資格の有無を世に問うものであろう。このような粒揃いとまでは言えなくとも、大半が味読するに足るソネット群から、分析の対象として「音楽」に因んだ4番(‘How many bards gild the lapses of time’)、15番(‘On the Grasshopper and Cricket’)、16番(‘To Kosciusko’)を取り上げることにしたい。これらのソネットのテキストには、歌あるいは声として表象された小川や虫などの発する自然音から楽器の調べ、さらには神

話的な「天球の音楽」まで、多種多様な音楽の形態が見られる。もちろん音楽が作品のモチーフになったり、構成要素になったりするのにはなにもキーツに限ったことではないが、彼の初期ソネットにおいてそれが果たしている機能にはこの詩人の特質が垣間見られるように思う。音楽と詩の神アポロに宛て、二度も初期にオードを詠んでいるキーツの場合、調和といった音楽的な理念が何らかの深い意義を有しているであろうことに疑いの余地はない。時間の許す限り、一つ一つテキストを丁寧に読み進めながら、上記のソネット同士や同詩集内の他のテキスト、あるいは他者のテキストとの関連性を吟味し、個々の音楽の使用法とその概念的な広がりを検証してみたい。

(すずき・よしかず：鈴木喜和)